

* 東京天文台創設75年、及び東京天文台百年記念切手 初日カバー

アーカイブ室新聞200号に東京天文台岡山天体物理観測所開始記念切手が発行された記事を書いた際、東京天文台関係の記念切手は、他に東京天文台創設75年記念切手、東京天文台100年記念切手があると紹介した。アーカイブ室新聞221号で岡山天体物理観測所開所記念切手の初日カバー5点を紹介したが、在野の天文愛好家（横浜の野地さん）からは東京天文台創設75年記念切手の初日カバー1部、東京天文台百年の初日カバー4部も送られてきていた。この号では東京天文台創設75年記念切手の初日カバー1点、東京天文台百年記念切手の初日カバー4点を紹介しよう。東京天文台創設75年記念切手の初日カバー（写真1）はなかなか重厚なもので、絵柄は65cm屈折望遠鏡とそのドーム、そしてゴーチェ子午環ドームが描かれたものになっており、記念スタンプは塔太陽望遠鏡の建物である。

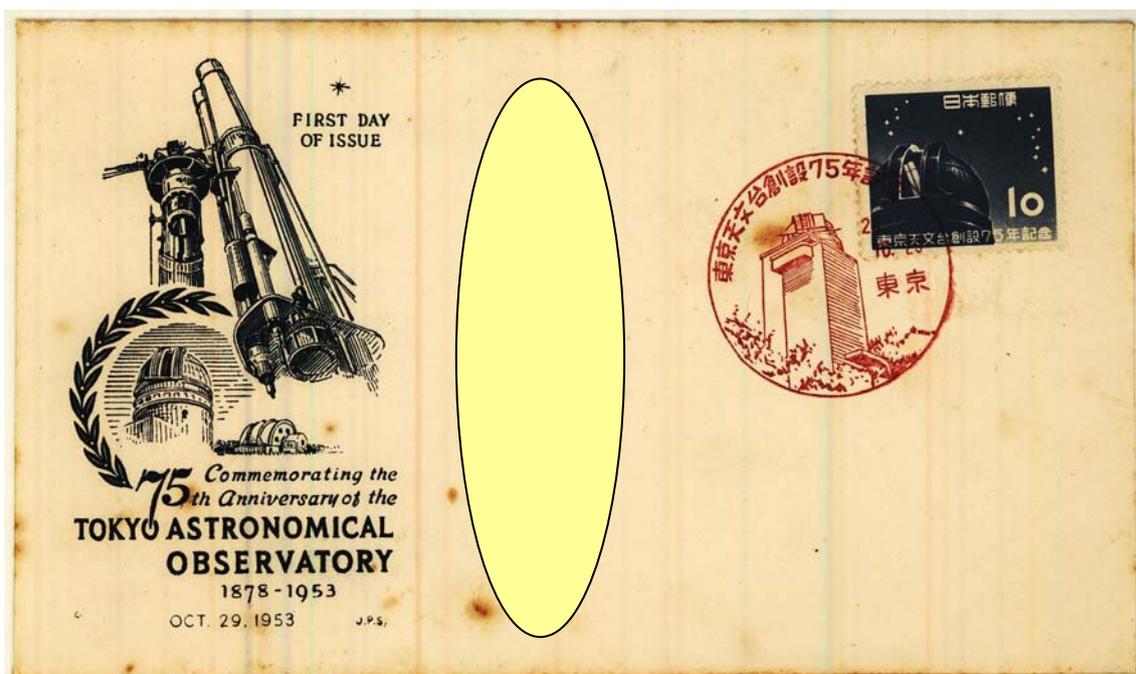


写真1 東京天文台創設75年記念切手の初日カバー

写真1の初日カバーには宛名書きされ送り状になっているので宛名部分は隠させていただいた。解説文の中に案内があり初日カバーの金額も記されている。また送り主が「日本郵趣協会」で東京新宿極私書箱1号というのもすごい。写真2が解説文であるがその内容は「東京天文台創設75年額面10円 この切手は同天文台の誇る六十五センチ赤道儀を容れる大ドームをおき北極星を中心に北斗七星とカシオペア星座を配したものである」と書かれている。切手の図柄は大ドームの開いたスリットの中に65cm望遠鏡と同架された38cm案内望遠鏡が見え、美しいデザインになっている。

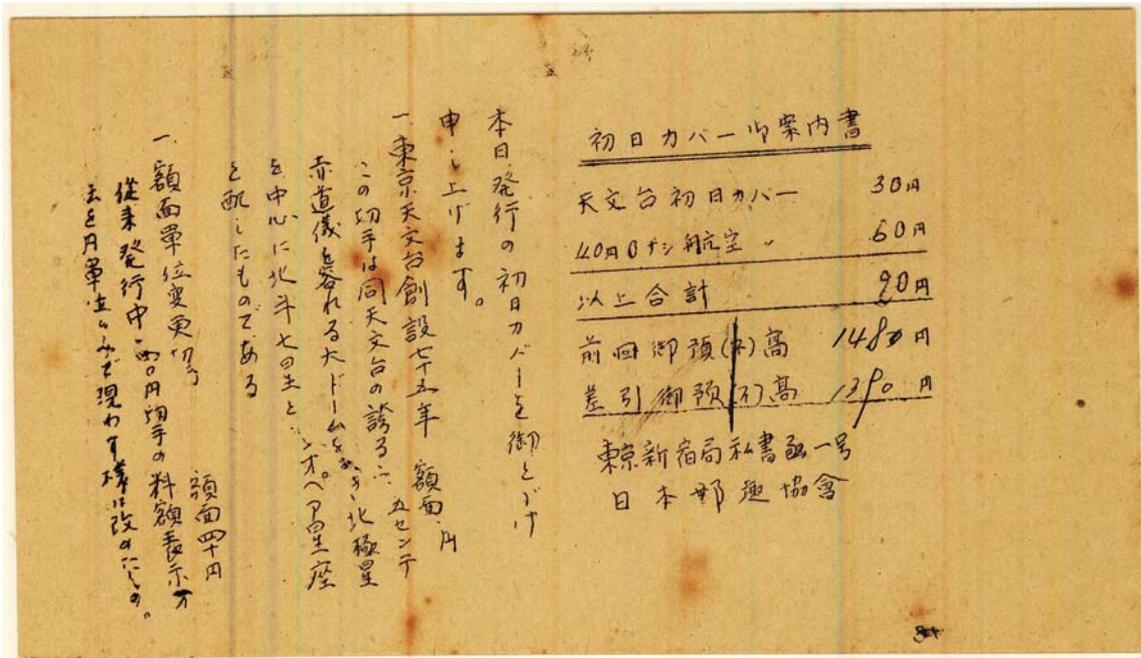


写真2 東京天文台創設75年記念切手の送り状

初日カバーのTOKYO ASTRONOMICAL OBSERVATORYの下には1878-1953 OCT. 29 1953とある。東京天文台創設75周年記念式典は1953年10月29日に举行され、その日を記念して東京天文台記念日は10月29日とされ、国立天文台になるまで、永年勤続者表彰などの行事は10月29日に行なわれていたのである。東京天文台創設75年切手の初日カバーはこの1枚が野地氏から送られてきたが、他にあったかどうか定かでない。

東京天文台100年記念切手の初日カバーはもっとあるのかもしれないが野地氏が入手されたのは4種類であった。写真3は星の日周運動の星野をバックに三鷹キャンパスにあった10mパラボラアンテナの太陽電波望遠鏡をあしらったものである(写真3)。



写真3 東京天文台百年記念切手初日カバーのその1

この封書に入った解説が写真4である。

東京天文台100年記念		Centenary of the Tokyo Observatory	
東京天文台は、1878年東大理学部星学科の観象台として本郷において発足、1888年に東京天文台と改称し、1924年に三鷹市に移転し本年が創立100年に当たる。同天文台は、東大付設の研究所として「天文学に関する事項の研究及び天象観測」を行うとともに、国立天文台としての性格をもった「暦書編成、中央標準時の決定及び現示並びに時計検定に関する事務」をも行う。現在研究活動のセンターを三鷹市におき、乗鞍、岡山等全国8施設を設置している。		A stamp is issued to commemorate the centenary of the Tokyo Observatory. In 1878 it started in Tokyo as a weather survey laboratory which belonged to the Astrophysics Section, Department of Science, of Tokyo University. Now this national observatory is in charge of astronomical and meteorological observations and the standard time in Japan, with its eight weather stations.	
発行日	1978年11月1日	First Day:	November 1, 1978
額面・種類	50円 1種	Denomination:	50 yen
図案	岡山天体物理観測所の188センチ反射望遠鏡と星座	Design:	Okayama Astrophysics Observatory
原画作者	武荒 勲嗣	Designer:	Kanji Takeara
版式・刷色	グラビア6色	Colors:	Multi-color (6 colors)
印面寸法	よこ25×たて33.5ミリのたて型	Printing:	Photogravure
用紙	上質グラビア紙 すかしなし	Size:	25 x 33.5 mm, vertical
シート	よこ4×たて5=20面構成	Paper:	White gravure paper, unwmkd.
銘版	「大蔵省印刷局製造」19番切手下	Sheet:	20 stamps (4 x 5)
発行数	2,700万枚	Imprint:	Printing Bureau, Ministry of Finance, under the 19th
		Quantity:	27,000,000 copies

写真4 東京天文台百年記念切手初日カバーに付けられた解説

この解説には「東京天文台は、1878年東大理学部星学科の観象台として本郷において発足。1888年に東京天文台と改称し、1924年に三鷹市に移転し本年が創立100年に当たる。同天文台は、東大付設の研究所として「天文学に関する事項の研究及び天象観測」を行うと共に、国立天文台としての性格をもった「暦書編成、中央標準時の決定及び現示並びに時計の検定に関する事務」をも行う。現在研究活動のセンターを三鷹市におき、乗鞍、岡山等全国8施設を設置している」とある。なお、この初日カバーは1978年11月1日発行である。

次に、りょうけん座の子持ち星雲M51をあしらった初日カバーである（写真5）。

写真5 東京天文台100年記念切手初日カバーその2

写真5の封筒の中には次のような解説カードが入っており、20cm屈折望遠鏡ドームの写真が載せてあり、写真4の解説記事とは違った解説がしてある(写真6)。

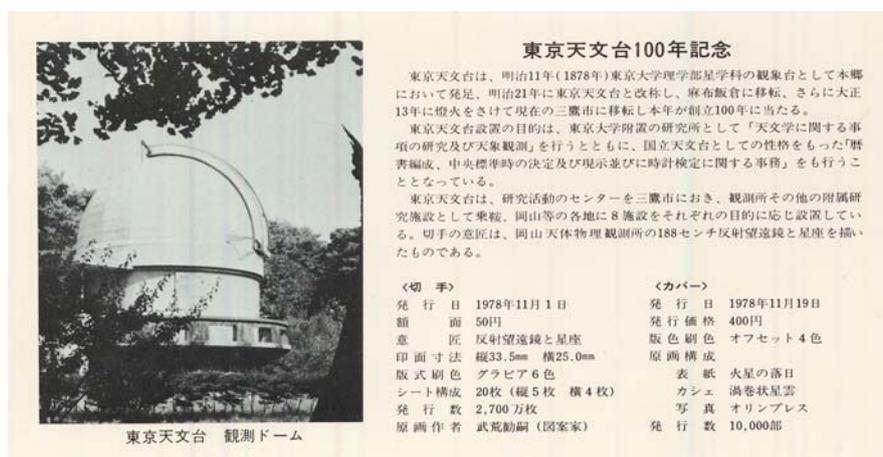


写真6 写真5の初日カバーの解説文

写真6の解説文は「東京天文台は、明治11年(1878年)東京大学理学部星学科の観象台として本郷において発足、明治21年に東京天文台と改称し、麻布飯倉に移転、さらに大正13年に燈下をさけて現在の三鷹市に移転し本年が100年に当たる。東京天文台設置の目的は、東京大学附置の研究所として「天文学に関する事項の研究及び天象観測」を行うとともに、国立天文台としての性格をもった「曆書編成、中央標準時の決定及び現示並びに時計検定に関する事務」をも行うこととなっている。東京天文台は、研究活動のセンターを三鷹におき、観測所その他の附属研究施設として乗鞍、岡山等の各地に8施設をそれぞれの目的に応じて設置している。きつての意匠は、岡山天体物理観測所の188センチ反射望遠鏡と星座を描いたものである。」となっており、発行年月日は1978年11月19日となっている。初日カバーというが、いろいろな日付のものがあるようだ。次に岡山天体物理観測所のドームをあしらった初日カバーが写真7である。

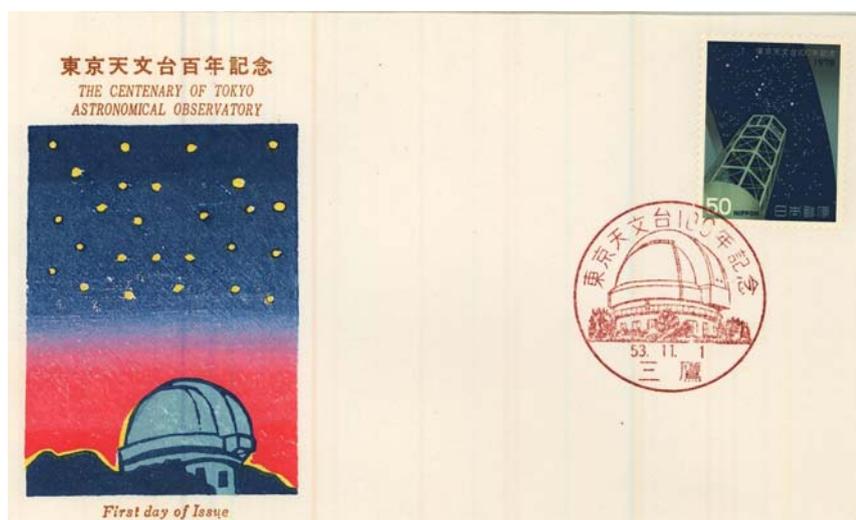


写真7 東京天文台100年記念切手初日カバーその3

写真7の絵柄は、岡山天体物理観測所の188cm反射望遠鏡ドームが夕焼けの星空をバックにしたものだが、星空はまったく文字通り絵空事である。その解説文は写真6の解説文と全く同じであるが、発行年月日が1978年11月1日とある。

次に、木曾観測所の105cmシュミット望遠鏡を絵柄とした初日カバーと解説文が写真8である。解説文は写真6と全く同じであり、発行年月日も1978年11月1日である。



写真8 東京天文台100年記念切手初日カバーその3と解説文

写真7、写真8の発行元が「郵政弘済会発行」となっており、写真3の封筒の裏にはNCCカバー No. 21/78 東京天文台ミリ波用6m電波望遠鏡と裏面に書かれている。1978年の東京天文台100年の頃には、10mパラボラアンテナはとくに撤去され、三鷹キャンパスにはな

かったはずだ。このことを検証するために東京天文台年次報告をひっくり返してみると、1972年版には電波関係として10mパラボラアンテナが載っているが、1973年版の年次報告には10mパラボラアンテナは記載されていない。筆者の記憶でもその頃10mパラボラアンテナは老朽化がひどく危険ということで撤去されたことを覚えている。なんという間違いだ。驚くばかりである。

そして写真5の初日カバーの封筒の裏には切手美術カバーシリーズ No. 134 とある。この記事を書いて、気がついたことは、郵政省の記念切手にかかる事業にもこのような大きな間違いがあるという驚きであった。